

カガヤキ

暫定的補足表題「ウオラントス」
ラテン語でボランティアの意

No.61(2022.3.15刊行)、広報委員会編集
茨城県立図書館発行
禁複写転載©広報委員会

通信紙「カガヤキ」の感想と期待

読者 A

私は、平素より茨城県立図書館ボランティア会通信紙「カガヤキ」を読ませていただいているが、広報委員会の桜井淳委員長より、同紙の感想を求められたため、以下記してみたい。

本通信紙は、桜井委員長が編集に関わるようになってから、質量ともに内容が非常に充実し、図書館ボランティアの領域を超えて、文化的素養も兼ね備えた多岐にわたる情報が提供されるようになった。現在、委員長の執筆量が大半を占めるようになっているが、今後は、各ボランティアの方々にも、より多くの話題を提供していただきたい。

「カガヤキ」に掲載された記事の中から個人的に影響を受けたのは、No.37の「県立図書館所蔵資料オペラ鑑賞法」である。私自身この記事に触発されて、あらためて

オペラを鑑賞するようになった。かつては、オペラを鑑賞するには、大枚をはたいて、レコードを購入し（漫画家の松本零士はゴミ捨て場に投棄してあった「ニーベルングの指環」全曲20枚弱のLPをただで手に入れたそうである）、イタリア語やドイツ語などの歌詞カードを見ながら曲の進行に懸命にくらいついて、何とか意味を理解していた。しかし、その後、ビデオテープやDVDなどの映像ソフトが普及し、歌詞カードなどなくとも、字幕で意味は追えるようになり、さらに、音声だけでなく、映像も鑑賞できるようになった。今では、YouTubeなどで、多くのオペラが視聴できるようになり、より身近な存在となっている。No.37の「県立図書館所蔵資料オペラ鑑賞法」では、リヒャルト・シュトラウスの「アラベラ」についての記述があるが、シュトラウスのオペラを重点的に鑑賞したので、そのあらましを述べてみたい。

リヒャルト・シュトラウスは、かなりの長命で、1864年生まれ、没年が1949年である。日本では、まだ、ちょんまげ(丁髷)をしていた蛤御門の変の年に生まれ、明治維新、日清、日露戦争、第一次、第二次世界大戦、昭和天皇の人間宣言を経た頃までを生き抜いたことになり、同じ80余年の生涯でもこれほどまでの波乱に満ちた時代の大転換期を経験した世代は希であろう。一番有名な曲は、オペラではなく、映画「2001年宇宙の旅」に使われた交響詩「ツァラトゥストラはかく語りき」の冒頭部分であろうが、この部分は「ツァラトゥストラ」としてではなく「2001年宇宙の旅」の曲としてのほうが有名である。シュトラウスは、ドイツ第三帝国の音楽局の総

裁であったため、その楽曲は、イスラエルでは上演禁止だったが、今ではどうなのだろうか。1986年のサントリーホールの特落しでは、シュトラウスの交響詩「英雄の生涯」が上演された。日本政府は1940年に皇紀2600年を記念して、世界の著名な作曲家に祝典曲の作曲を委嘱したが、日英関係の悪化の折、イギリスのベンジャミン・ブリテンは、鎮魂交響曲を贈ったのに対して（納期に間に合わせるため出来合いの曲を贈っただけという説もある）、シュトラウスは「皇紀二千六百年奉祝曲」を献上している。

オスカー・ワイルドの戯曲を題材にした、シュトラウスの比較的初期のオペラ「サロメ」は、極彩色の管弦楽の音色でもって官能美を聴覚的に極限まで表現した一大傑作である。このオペラの中の「七つのヴェールの踊り」は、聴き所ならぬ見所となっている。舞台監督の演出や演ずる歌手（歌手でなく本職のダンサーが代理で踊ることもある）の力量によって内容が大きく異なるため、公演ごとにどのような舞台になるか興味津々である。このオペラの公演を、予備知識なしで観に行った人がいて仰天したそうなので、観に行く人は注意が必要である。

シュトラウスのオペラの中でも異色なのは、「ナクソス島のアリアドネ(Ariadne auf Naxos)」で、このオペラでは、同名のオペラをウィーンの貴族の邸宅で初演公演をするという二重構造になっている。2幕途中でオペラの進行とは直接関係のないコロラトゥーラの超絶技巧を駆使したアリア「偉大な王女様」(Großmächtige Prinzessin)が歌われる。前述の「アラベ

ラ」でも、同様のコロラトゥーラの歌唱があるが、筋の展開を無視して無理やり押し込んだ感があり、場違いな印象は否めないが、「ナクソス島」では、オペラとドタバタ喜劇を同時に上演するという設定にすることで、この不自然さを巧みに回避している。「偉大な王女様」の世界最高の歌手は、エディタ・グルベローヴァであろうが、残念なことに2021年に74歳でこの世を去った。

今回は、リヒャルト・シュトラウスの偉大な作品を紹介する機会を与えられたことに感謝しつつ、グルベローヴァへの哀悼の意も込めて彼女も出演していた「ナクソス島のアリアドネ」のオペラ映画の映像ソフトのジャケットを掲載させていただく。



一番手前はアリアドネ役の [Gundula Janowitz](#) (wikipediaによると2022年2月現在84歳)

編集注) 数箇所の句点を加えただけで、原文のまま。

常陸国西念寺での親鸞の 20 年間 総論

宗教研究者(曹洞宗雲水)

桜井 淳

はじめに

親鸞(浄土真宗創宗者、法然の浄土宗の継承発展者であり、「絶対他力」を掲げる、1173-1262)は、越後国での流刑明け後、どのような経緯か明確ではないものの、35歳の時、家族(妻の恵信尼、子供ひとり)と弟子と共に、信濃国、上野国、下野国を経て、常陸国稲田にある西念寺に到着した。

親鸞は、西念寺において、弟子24人と共に、約20年間にわたり、布教活動をおこなった。親鸞は、日本における歴史的創宗者のひとりであり、その人物が、常陸国に、20年間も留まったことに、どのような社会的な必然性と偶然性が作用したのか、大変、興味のある問題である。

そのため、私は、「世界千寺巡礼」の一環として、西念寺のみならず、弟子達にゆかりのある寺を訪問し、引き継がれた魂に合掌した。

代表的な仏教宗派と信者数

なお、日本の代表的な仏教は、歴史順に記せば、天台宗(最澄、平安期に「万人成仏」を掲げる、767-822)、真言宗(空海、平安期に「即身成仏」を掲げる、774-835)、浄土宗(法然、鎌倉期に「他力本

願」を掲げ、1133-1212)、臨済宗(栄西、鎌倉期に日本初の禅寺建立、1141-1215)、浄土真宗(親鸞、鎌倉期に法然の浄土宗の継承発展者であり、「絶対他力」を掲げる、1173-1262)、曹洞宗(道元、鎌倉期に「即心是仏」を掲げる、1200-1253)、日蓮宗(日蓮、「法華経」の布教、1222-1282)である。

当時と現在では、仏教信者数は、大幅に異なり、現在の仏教信者数から、社会的な位置や影響力を図ることは、できないものの、三大宗派は、浄土真宗1300万人、真言宗1100万人、日蓮宗1000万人であり、意外と多いのは、浄土宗647万人であり、衰退して意外と少ないのは、天台宗150万人である。

唱名「南無阿弥陀仏」は、天台宗、浄土宗、浄土真宗、「南無大師遍照金剛」は、真言宗、「南無妙法蓮華経」は、日蓮宗、「南釈迦牟尼仏」は、臨済宗、曹洞宗。

常陸国稲田の西念寺

私が西念寺を訪問したのは、12年前のことであり、当時のこと思い出し、記したい。JR水戸線の水戸発に乗り、六番目の駅が稲田駅である。駅の北側近くに、国道50号線が走っており、道に沿って西側に約15分歩くと、右手に、高さ約50m、南北方向に約200mもある杉並木が見える。その奥に南門があり、中に入ると、右手に本堂、左手に鉄筋コンクリート二階建ての宿坊か研修施設のような建物が見える。

本堂の東側の小高い丘を約5分歩くと、親鸞の遺骨を納めた親鸞卿が見える。



浄土真宗西念寺本堂(稲田)



浄土真宗西念寺親鸞廟(稲田)

稲田駅周辺は、典型的な田舎町であり、杉並木の西側一帯は、広大な田園になっており、鎌倉期も訪問時も、大差ない光景であったように感じた。

親鸞の弟子 24 人の寺

親鸞は、寺を持たず、弟子もいなかったと言われているものの、実際には、親鸞を師と仰ぐ僧侶が、多く集まり、24人が親鸞に学び、やがて、常陸国などに、自身の寺を建立し、浄土真宗の布教に精進した。

自宅から徒歩約 20 分の所の茨城県立歴史館近くに、弟子のひとりが建立した信願寺像が設置されている。私は、修行を兼ね、自宅から徒歩約一時間の所にある弟子

があり、その向かって左側の庭には、越後国から常陸国まで旅した時の親鸞家族の銅



浄土真宗信願寺本堂(水戸)



浄土真宗信願寺親鸞三体像(左から、親鸞、恵信尼、子供)(水戸)

達が建立した五つの寺を訪問し合掌した。

結びに代えて

本稿は、総論にすぎず、親鸞と恵信尼にかかわる未解明な問題については、意図的に、採り挙げなかった。五木寛之(作家)は親鸞の歴史とフィクションを織り交ぜた大変面白い小説『親鸞 上下』(講談社、2010)を発表した。梅原猛(哲学者)は査読なし学術書『梅原猛著作集 三人の祖師 最澄 空海 親鸞』(小学館、2002)を発表した。次の執筆機会があれば、親鸞についての未解明問題について、考察してみたい。

編集後記

何度もくり返しになりますが、通信紙の本文は、「である調」、編集後記は、「ですます調」と定義してあります(No.25 参照)。編集後記は、編集の舞台裏の話題も含むため、意識的に、柔らかい表現になるように工夫してあります。

原稿は、原則として、広報グループからの依頼原稿とボランティアからの投稿原稿(読者投稿含む)からなります。原稿執筆の留意事項は、「投稿規定」(No.31 参照)に記されているため、その内容を遵守してください。

投稿原稿の内容、原則として、自由であります。ボランティア相互の参考になるような内容が好ましいと思います。俳句や短歌、短編小説なども歓迎します。

いまの広報グループが編集したバックナンバー(No.25-60 参照)から読み取れるとおり、図書館側とボランティア側は、相互信頼と相互協力に基づき成立していることを考慮し、相互に、敬語は、編集段階で、使用しないようにしています。

通信紙では、時々、教会のボランティアの活動報告や仏教にかかわる報告も含みますが、特に、宗教的な意図があつてそうしているわけではなく、両者の共通点が、人間としていちばん尊い倫理(morals)と徳(reprimand)について考察しているためです。ボランティアとは、倫理を高め、徳を積むための自主的行為です。仏教では、座禅、読経、滝修行、修験道歩きなどにより、精神力を高め、倫理や徳を高めています。

五木寛之(作家)は、尾崎士郎の小説「人生劇場」のストーリーにヒントをえた小説「青春の門」(全9篇)の7篇の完成段階において、3年間休筆し(1981-84)、龍谷大学文学部仏教学科(浄土真宗)の聴講生となり、「仏教史」の勉強をしました。五木は、その後、「仏教学」を基に、国民の目の高さから、倫理や徳について、語り始めました。

今回の本文では、スペースの関係のため、記載しませんでした。仏教の信者数は、四つの世界宗教の中では、意外なほど少なく、世界の宗教の信者数約58億人に対する割合は、約6%であり、最も多いのは、キリスト教約33%、次に、イスラーム約20%、ヒンドゥ教約13%です。世界では、キリスト教信者が多く、特に、欧米先進国では、宗教信者に対する割合は、70%と高いのに比べ、日本では、世界の七不思議のひとつに数えられるほど少なく、わずか2%弱にすぎません。

本文の「親鸞総論」は、常陸国の歴史の現場見学と考察です。常陸国の歴史には、採り挙げてみたいテーマが少なくなく、身の回りでは、徳川家、弘道館、偕楽園、水戸学(たとえば、「大日本史」の編纂過程において、水戸藩で成立した学問であり、主に、朱子学に基づくものの、神道と国学も採り入れ、特徴は、日本史における権力の正統性(たとえば、尊王攘夷論)の問題に強い関心を示す点)などです。常陸国の歴史については、本文か「編集後記」において、時々、取り上げてみたいと考えています。

桜井 淳